

初めて建寧に到り詩を賦す（謝枋得）

雪中の 松柏 愈々 青青

綱常を 扶植するは 此の 行に 在り

天下 久しく 龔勝の 潔 無し

人間 何ぞ 独り 伯夷 のみ 清からんや

義 高うして 便ち 覚ゆ

生の 捨つるに 堪えたるを

礼 重うして 方に 知る

死の 甚だ 軽きを

南八 男児 終に 屈せず

皇天 上帝 眼 分明

雪中松柏愈青青 扶植綱常在此行

天下久無龔勝潔 人間何濁伯夷清

義高便覺生堪捨 禮重方知死甚輕

南八男兒終不屈 皇天上帝眼分明

解説 作者は元朝の招きを拒絶しつづけてきたため、ついに福建の参政魏天祐に執えられ、北京に送られる途中、建寧に着いて、深く意を決して、妻子、朋友にのこした詩。

語釈 ※建寧 福建省建甌県。 ※雪中松柏 節操のかたいこと。「論語」子罕に「歳寒うして然る後に、松柏の凋むに後るを知る」に基づく。

※綱常 人の実践すべき道徳。不変の倫理。 ※扶植 助け立てる。 ※龔勝 字は君実、彭城の人。 ※伯夷 殷の孤竹君の子で弟の叔斉とともに周の王朝の粟を食うのを恥じ、首陽山で餓死したという高士。 ※南八男児 唐の南霽雲のこと。 ※皇天上帝 天帝。

通釈 雪中に立つ松柏は益々その緑を表すように、自分も困難に遭つても変節しないでいる。わがこの度の旅は、三綱五常の道徳をうち立てるためである。今は天下の道義もすたれて、漢の龔勝のような清廉潔白な男は少なくなつた。しかし、この世に伯夷だけが清潔な者とは限らない。自分も廉潔をもつて任じている。義の高いことを悟つて、その為に生を捨ててもよい。また、礼の重いことを知つて死の甚だ軽いことを理解した。あの南八は男として遂に不義に屈せず、絶食して死んだという。自分も宋の遺臣として義のために死のうと思う。この心は天帝もはつきりと御照覧くださるであろう。